

絶対音感と相対音感の保持が音楽活動に与える影響

○佐藤典子

藤崎和香#

竹内貞一#

(早稲田大学文学部) (お茶の水女子大学人間文化研究科) (早稲田大学文学研究科)

【問題と目的】宮崎(1997)は相対音高処理を必要とする課題に対し時に困難を示す絶対音感(A P)保持者の存在を一連の研究をもとに示している。これらの研究で対象とされている音楽専攻の学生のみならず、日常的な音楽活動を行う中でも同様の困難を感じている者が存在すると思われる。本研究ではアンケートを行い、A P保持と相対音感(R P)保持の程度と、両音感の有無が音楽活動において役立つか、またその有無によって困難を感じる可能性があるかを調べることを目的とする。

【方法】調査対象：大学で音楽を専攻する学生約50名、一般大学学生または社会人で現在も何らかの音楽活動を行っている者約180名、その他の一般大学学生約290名を対象に調査を行った。記入不備の回答を除く516名分を用いて以下の分析を行う。

アンケート：Ⅰ部にA Pについての質問、Ⅱ部にR Pについての質問、Ⅲ部に音楽経験等についての質問を配置する構成で作成した。なお本稿において検討の対象となる部分は、Ⅰ部-1 (A Pの定義とA P保持の程度)、2 (A P保持者対象：この音感の保持が役立つか、不利であるか)、3 (A P非保持者対象：不利であるか)、Ⅱ部-1・2・3 (R PについてのⅠ-1・2・3と同様の質問)である。また、このアンケートにおいては、A Pを「ある音を聞いた時に、他の音との比較なしにその音名を特定できる能力」、R Pを「音と音との距離(音程)関係や、ある調の中での音高関係を把握できる能力」と定義した。

【結果と考察】A PとR Pの定義をもとに、それぞれについて「持っている」「不完全だが持っている」「持っていない」「わからない」のどれかに回答させた結果をTable1に示す。

A P群140名・不完全A P群140名に対し、音楽活動を行う上でA Pの保持が役立ったかを質問した結果、A P群では67%が役立つと答えたが、不完全A P群では37%のみであった(Figure1)。また

同じ程度のA P保持者の中では、R P保持の程度により差がみられ(A P群：R P=70%、不完全R P=83%、非R P=46%/不完全A P群：R P=45%、不完全R P=51%、非R P=17%)、両音感保持のバランスによる音高処理方略の違いが示唆される。さらに、A P保持が音楽活動を行う中で不利となったかを質問した結果、A P群では24%が不利と答えたが、不完全A P群では6%のみであった。また、非A P群を対象として、A Pを持たないことで音楽活動を行う時に不利と感じたことがあるかを質問した結果、37%が不利と答えた。これらの結果から、A Pを持つために日常的な音楽活動上の困難を感じている者の存在が示されたが、不完全A P群には少ないことは、宮崎の実験的研究における不完全A P者の顕著な困難とは異なる傾向である。ただし本研究では自己報告により音感保持の程度を決めたため、同質の被験者とは言えないことの影響と思われる。この影響について明らかにするには、自分のA Pを「不完全」とした群の特徴のより詳細な検討が必要である。

R P群173名および不完全R P群84名に対し、音楽活動を行う上でR Pの保持が役立ったかを質問した結果、R P群では53%が役立つと答えたが、不完全R P群では40%のみであった(Figure2)。R Pでは不完全であるかによって回答率にA Pほど大きな差は見られない。さらに、R P保持が音楽活動を行う中で不利となったかを質問した結果、ほとんど不利と答える者がいなかった(R P群=4%、不完全R P群=1%)。また非R P群を対象として、R Pを持たないことで音楽活動を行う時に不利と感じたかを質問した結果、33%の回答者がそう感じていた。これらの結果は先行研究において音楽活動における相対音高処理がA Pより本質的との指摘があるが、その反映の結果とも考えられる。
[謝辞] 発表者以外の音楽心理学勉強会のメンバーおよび被験者の皆様のご協力に感謝致します。

Table1. A PとR Pの保持者数

		R P				計
		有り	不完全	無し	不明	
A P	有り	89	23	13	15	140
	不完全	40	39	18	43	140
	無し	27	18	41	22	108
	不明	17	4	8	99	128
計		173	84	80	179	516

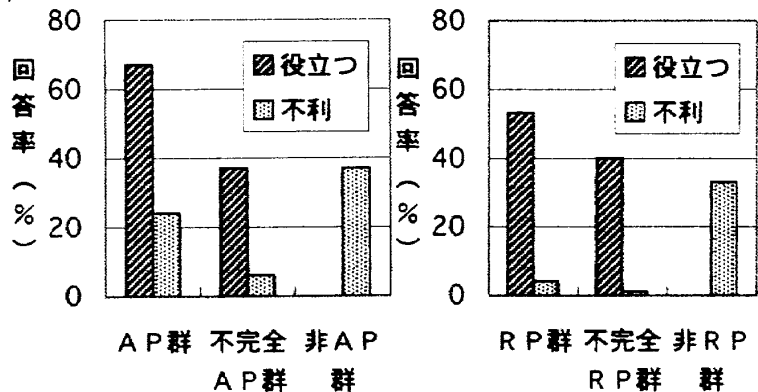


Figure1. A P保持と音楽活動 Figure2. R P保持と音楽活動

学
習